

東寺と違う？

—西寺講堂跡発掘調査—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 西寺は、延暦13年(794)の平安京遷都に伴い東寺とともに国家鎮護を担う官寺として造営されました。桓武天皇は、即位した平城京にて新たな寺院の建立と移転を禁じたため、遷都に際して平城京の寺院は留め置かれ、平安京内には西寺と東寺のみが建立されたのです。

西寺と東寺 両寺は平安京の南端、九条大路に面した九条一坊九町から十六町の東西2町、南北4町の計8町の区画を占め、朱雀大路を挟み左右対称となり、南半に伽藍、北半に寺院の運営に関わる諸施設が配置されました。

西寺については、延暦16年(797)に藤原緒嗣が「造西寺長官」であったことが『続日本後紀』に見え、遷都直後から造営が開始されました。長官には、坂上田村麻呂も名を連ねており、桓武天皇が信任する人物を長官に据え、西寺造営を重要視していたことがわかります。弘仁4年(813)には、東西二寺で初めて坐夏ざげの法要が行なわれており、このころ金堂や僧房が整ったと考えられます。講堂は天長9年(832)に建物が完成し、新造した仏像を安置しました。しかし、塔の造営は遅れ、元慶6年(882)に造塔料が定められていることから、遷都から約100年をかけて伽藍が整えられたことが



写真1 礎石及び唐居敷座・地覆座(西から)

わかります。

東寺が弘仁14年(823)に嵯峨天皇から空海に下賜されて以降、西寺は京内唯一の官寺として隆盛し、全国の僧侶を管理する僧綱所そうごうしよも設置されました。しかし、正暦元年(990)の「西寺焼亡」を契機に衰退したとされ、天福元年(1233)に塔が焼亡した際には「もとより荒廢の寺、何をか為なさんや」と『明

月記』に記されています。西寺はその後史料から姿を消し、塔の焼亡以降廢絶したとされています。

西寺跡では、これまでの発掘調査によって南大門、中門、金堂、塔、僧房しょうしぼう、小子房じきどういん、食堂院などが確認され、伽藍配置は東寺とほぼ左右対称となることが明らかとなり、史跡西寺跡として保護が図られています。

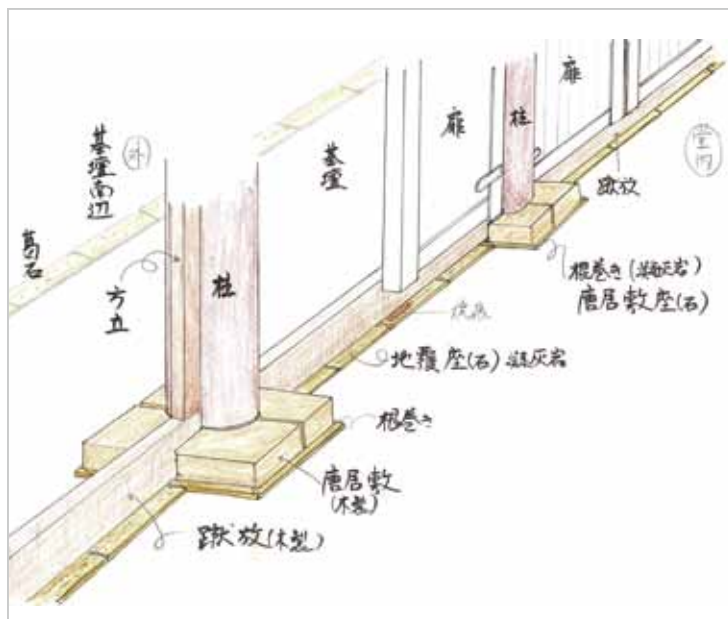


図1 入口軸組構造模式図 (梶川敏夫氏作図)

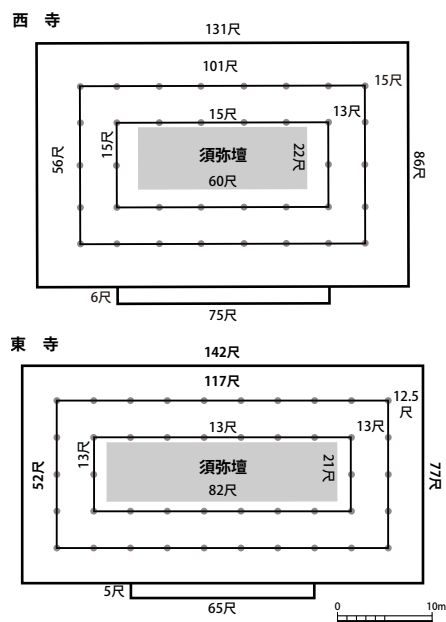


図2 西寺と東寺の講堂平面復元図

講堂跡の調査 唐橋西寺公園中央に残る土壇「コンド山」は、伽藍中枢の講堂跡と推定されていましたが、これまで調査が行なわれていませんでした。

京都市では、民有地を多く含む史跡西寺跡を長く保全していくため、将来の保存活用計画策定を見据え、西寺跡の普及啓発を重要な課題と捉え、講堂跡において平成30年度から3箇年の計画で確認調査を実施しました。

姿を現した講堂 現在、コンド山は高さ約2.5mあり、東寺との比較から基壇にしては高すぎると考えられていました。調査を進めていくと、多量の瓦の破片を含んだ土で後世に盛土されており、廃絶後に周辺が耕作地になった際に基壇の上に土が積み上げられ、現在の高さになったことがわかりました。

そのおかげで講堂の基壇は極めて良好に残されており、原位置を保つ礎石1基を含め、柱位置を示

す礎石抜取穴を計9基確認できました。さらに叩き土間の床面は被熱によって赤く変色し、真っ赤に焼けた多量の瓦が上面に堆積していたことと、床面直上から出土した土器の年代観から、正暦元年の焼亡によって講堂も焼失したことが明らかとなったのです(写真1)。

また、入口の軸組構造では正面入口に当たる側柱筋の柱廻りには、凝灰岩製の根巻きを据え、柱間を2列の凝灰岩製の地覆座で繋いでいることも判明しました。石材上面に残された炭化痕跡から、柱廻りに扉の軸受けとなる木製の唐居敷、柱間には蹴放が設けられていたことがわかります。このような大規模な建物に唐居敷と蹴放を設ける例は、現存する建物では奈良新薬師寺本堂のみであり、重要な成果となりました(図1)。

さらに仏像を安置した須弥壇や基壇外装の凝灰岩抜取溝も確認できたことから、講堂の基壇、建物、須弥壇の規模が明らかとなり、東

寺講堂と比較することが可能となりました(図2)。

おわりに 西寺講堂の規模については、『東宝記』「東寺新定講堂図」の註に基づき、東寺と同様の身舎・庇ともに13尺等間の七間四面堂と考えられてきましたが、調査の結果、身舎15尺等間、庇13尺の五間四面堂であり、東寺と異なることが確定しました。西寺と東寺では、金堂も規模が異なることが指摘されており、造営当初から設計が異なっていたと考えられます。建物規模は安置される仏像と密接な関係があることを踏まえると、左右対称の官寺として造営された西寺と東寺では担うべき宗教的な役割が異なるものであったと想定されます。

西寺跡は民有地が広がることもあり、伽藍の全容はまだ明らかになっていません。今後の調査を丁寧積み重ねることで西寺と東寺の役割を明らかにしていきたいと思ひます。

(京都市文化財保護課 西森正晃)